

あなたもサラリ

中村 武





あなたもサラリーマン

中村武志

朝日新聞社

著者紹介

中村武志（なかむら・たけし）

1909年長野県生れ。

現在 国鉄本社厚生局勤務

著書 随筆集「沢庵のしっぽ」

小説集「サラリーマン目白三平」その他

現住所 東京都新宿区下落合1〜527

書名 あなたもサラリーマン

定価 三二〇円

昭和三十七年四月二十五日第一刷発行

著者 中村武志

発行者 朝日新聞社 伴 俊彦

印刷所 図書印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 名古屋 小倉

あなたもサラリーマン・目次

中村武志

下役からのお願い十五カ条

まえがき

第一のお願い

第二のお願い

第三のお願い

第四のお願い

第五のお願い

第六のお願い

第七のお願い

第八のお願い

第九のお願い

第十のお願い

第十一のお願い

第十二のお願い

9

10

16

22

26

29

32

36

39

42

48

52

56

7

第十三のお願い

58

第十四のお願い

64

第十五のお願い

67

圧力団体をいなす法

圧力団体をいなす法

69

亭主族は三重苦

75

子供一辺倒型の女房

79

亭主は四分の一

84

亭主のいき抜き旅行

87

男五癖の弁解

91

定年ノイローゼにならないために

95

職場のエセ親切

99

沢庵のオモシ

103

サラリーマン金使い六カ条

無痛納税

サラリーマン金使い六カ条

頭が痛いボーナス期

昔のボーナス、今のボーナス

ボーナスはもらったが

月給袋

サラリーマン今昔

サラリーマンと連休

秋の行楽七つのすすめ

サラリーマンの読書

サラリーマン夫人の心得

奥さまへの忠告とグチ

109

111

114

117

121

124

126

129

132

135

139

148

145

サラリーマン夫人の心得

150

わが家の昨今

158

女房の新方針

160

良縁への招待

162

亭主の小遣い

165

上役の奥さん

183

ご近所値段

185

新巻の顔

188

リンゴの味

190

私の自慢料理

193

テレビのスープ

196

不便な自家用車

197

舞子さんと尾骶骨

200

周遊券

203

風呂場のジャンケン

207

玄関番

210

日本まんじゅう

211

マージャンと国際法

214

上役の奥さん

220

二足のワラジと雲助タクシー

223

二足のワラジと雲助タクシー（その1）

225

二足のワラジと雲助タクシー（その2）

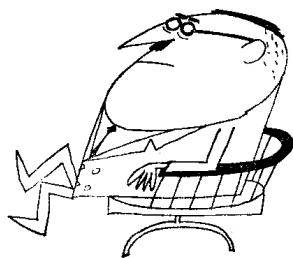
245

あとがき

285

装幀・カット 柳原良平

下役から上役へのお願い十五カ条



まえがき

サラリーマンは、いかにすれば出世ができるかというようなハウ・ツーものが、巷にはらんしている。それには著者の貴重な体験や苦労話が綴られていて、それぞれ役にたちそうなことばかりだが、残念ながら、多少の参考になるというだけのことである。だいたい本を読んで得た知識やテクニクだけで、出世しようなどと考えるのは虫がよすぎるというものである。

どんな知識でも、十分に納得し、それを身につけた上でなければ、何一つ役にたたないと考えるべきだ。無理に背のびして、馴れないことをやっても、失敗こそすれ、成功はおぼつかない。つけ焼刃では駄目なのである。体に吸収され、血や肉となり、はては性格にまでなったものだけが、日常の職場生活の中で、上役に好感を与え、同僚や後輩に影響し、それが、時には出世のキツカケになると言っている。万一出世しなかったと言って、それまでの人間勉強が無駄な努力だったと考える人は、まだそれが血や肉になっていない証拠と言えるだろう。

下役にたいする、いろいろな指導書や教訓書は多いが、下役から上役への注文とかお願いというものは、あまり見当たらないようである。私も下役生活三十年を越えたのだから、このへんで、上役へ向って、少しは注文やらお願いを申し述べても、それほど不遜ではないだろうと勝手に考

えた次第だ。

下役教育ということも必要だが、同時に、下役をよくするのも悪くするのも上役次第と言えそうである。その意味でも、下役の注文やお願いを十分に頭に入れておいて、上役は先頭にたつていい仕事をするのがかんじんなのだ。読んでいただければ、多分お分かりのことと思うが、これは上役諸氏を非難攻撃するためのものではない。むしろ上役が、現在以上の上役になるためには、多少はお役にたつのではないかと私はうぬぼれている。また、上役になりたい下役——上役になりたくない下役はいないはずだが——にとっても少しは参考になるだろう。

ここで使っている上役という言葉は、中間職の主任、係長、それからせいぜい課長程度の役付を指しているところ承知いただきたい。私たち下役にとって、大上役の最高幹部の人物のよしあしは、さほど関心事ではない。なんとと言っても、一日中顔を合せていて、直接指示、命令をいただく小上役の在り方が問題なのである。

お忙しい上役は、一番短い「第十五のお願い」（67ページ）をお読み下さるだけで結構である。

■ 第一のお願い

遅参・早退をしていた
だきたいということ

いち早く出勤して、緊急の仕事のために、指示、命令を下したり、あるいは、前日の仕事の結

果にしたがって、早急に対策をたてなければならぬというような特別な事情がある場合は別として、上役は、なるべくゆっくりご出勤願いたいものである。

上役が出勤しなければ、下役というものは、なかなか働かないなどとお考えになっているとしたら、いささか私たちを見くびっていると言いたいのである。私たち下役といえども、ちゃんとした自主性もあり、与えられた仕事に責任をもっているつもりだ。上役の在、不在に関係なく、すべきことはするつもりである。自分の一生を托している会社が、営業不振の挙句、つぶれてしまつては、こちらが路頭に迷うからである。

ところが、上役が下役の誰よりも早く出勤して、自分の椅子にでんと腰をおろし、下役が出勤して来るたびに、壁の時計の方へ、ちらりと視線をやるようなことをなさるのは、百害あって一利なしと言うべきである。

そんなことをすれば、ラッシュ・アワーの電車やバスに、命がけで飛乗り、出勤時間までに、意気こんで駆けつけた部下を、すっかり萎縮させるばかりでなく、逆効果を生むおそれがある。ひそかに部下は抵抗をはじめるのだ。

つまり、監視人のような上役を上に乗っている下役は、必要以上に始終上役を意識していなければならぬ。その結果、うるさい上役のいる間だけは、実際にも働き、またいかにも懸命に働いている素振りをしているが、ひとたび彼が席をはずすと、下役たちは、襲い来る解放感に、思

わず心身をゆだねてしまうのだから、仕事の方は当然おろそかになってしまう。

きよろきよろと目を四方八方にくぼっていなくても、立派な上役の下にいる下役というものは、自然のうちに、かげひなたなく働くものなのだ。いい上役にたいしては、仕事の上で恩がえしをしようという気持を、サラリーマンはいつでももっている。近ごろの若いサラリーマンは、利己主義で、チャッカリしていて、礼儀知らずで、レジャーばかり楽しんでいるなどと、頭ごなしにきめつけてしまわないでいただきたい。時代はどんなに変わっても、青年には純粋ないい面をいくらでももっている。それを引きだして伸ばしてやるのが上役の仕事である。

上役も夫婦喧嘩はする。朝のどがけにそれをする、いつもより早く家を飛び出すことになる。それは結構だが、会社へはいるのはしばらくお待ち願いたい。どこの会社の近くにも、コーヒー好きのサラリーマンのために、一軒くらいはコーヒー店が必ず早朝から営業している。そこで、香りの高い、コクのあるいれたてのコーヒーを、ゆっくり味わっているうちに、夫婦喧嘩の腹だちも自然になお、冷静になって来るだろう。ご機嫌を取戻してから、何事もなかったような顔をして出社していただきたい。

夫婦喧嘩の自由を束縛するのではないが、私たち下役の場合とちがって、上役のそれは、単に家庭内のこととして済ますわけにはいかないのであって、影響するところが多大であることを、奥さま方もあらかじめ承知していただきたいのである。上役夫婦のかりそめの喧嘩が、多くの下

役に不快の念を与え、困惑させ、会社の仕事を渋滞させる場合もあるのだから、奥さま方も、多少のことは我慢なさって、私たち下役のために、機嫌よくご主人を送りだしていただきたい。

夫婦喧嘩のせい何かは分からないが、不機嫌の時には、もしまわり書類に、なかなかハンコを押さない上役がいる。急ぎの書類ではないから、一日、二日はおくれても構わないけれど、夫婦喧嘩の飛ばちりを仕事の上に乗せて及ぼすのは、公私混淆も甚だしいではないか、などと正々きって上役を責めたてるつもりはないが、こんなことはないに越したことはないのだ。

私たち気の弱い下役は、上役が出勤するや否や、素早く顔色を読み、その日の機嫌、不機嫌を判定する。その日一日が、愉快に過ごせるかどうかということは、下役にとつては一大事だからである。このように、会社の仕事をするのに、上役個人のお天気に関心を払わなければならないのは、馬鹿々々しい限りである。しかし、上役も人間なのだから、一年中上機嫌でいるわけにはいかないだろう。時には、不機嫌なのもやむを得ないと諦めるよりほかはない。

さて、上役の機嫌が悪いとなると、私たち下役は彼を敬遠して、なるべく一日中接触しないような方法を講じる。その日は、上役の指示、命令を仰がなくても済むような仕事に専心するのだ。そして、彼のハンコを必要とするような書類は、翌日に延期する。ただ困ることは、こちらの計画通りにいかないことも起って来る。時には、緊急を要する書類がでて来るのである。すぐにも処理しなければこちらの責任になるので、機嫌の悪いのは承知の上で、おそろおそろハンコを頂

戴にでかける。分かりきった屁理屈を並べ、一種のイヤガラセを言い、上役はあっさりハンコを押してくれない。こちらは低姿勢で、細心の注意を払い、幾度でも頭を下げた挙句に、ようやくハンコをいただければ大成功なのである。ほっと安堵はするが、同時にはげしい憤懣がこみあげて来る。

“この仕事で、俺自身が何か利益を得るならば別だが、会社の利益のために、いったい俺はなぜこんなに卑屈になって、上役にべこべこしなければならぬのか。ハンコを押し渡る上役は、明らかに会社の仕事を妨害しているわけではないか。会社の仕事を妨害する人物が、威張り散らして高いサラリーを貰い、責任を果たそうと努力する人間の地位が低く、サラリーも安いとは、矛盾も甚だしいではないか”

こんなことをぶつぶつ呟きながら、私たち下役は、自分の席へ戻って来るのだ。

そこで、機嫌の悪い上役に切にお願いしたいことは、押すべきハンコならば、屁理屈は並べずにあっさり押していただきたい。その代り、「この大馬鹿野郎」と、私たちを一喝していただきたい。それで、上役の気が晴れるならば、こんなことはお安いご用である。

仕事がないのに、いつまでも席に残っている上役がある。上役といえども、大臣、総裁、社長でないかぎり、その上にまた上役をいただいているわけだ。たとえば課長の場合を考えると、上役の部長に遠慮して、ぐずぐずしているのにちがいない。こうなると、私たち下役は、退社の時